かささぎ 通信 第35号

2015年6月12日　発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　　「森三郎の作品を読む会」

二〇一五年五月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和8年9月号初出の二作品を読みました。「副級長」・「西瓜」（『森三郎童話選集　夜長物語』所収）

『赤い鳥』昭和8年9月号掲載の「副級長」は、「森三郎」名義、「西瓜」は「早川七郎」名義の作品です。

どちらの作品も、少年が度の過ぎたいたずらをして、それを反省するに至るまでの心理を描いています。

この当時、「赤い鳥」に森三郎作品が複数作掲載されていますが、その月毎にテーマに類似性が見られます。「赤い鳥」編集者としての立場上、誌面を整えるために名義を変えて作品を発表していたのではないかという考えも聞かれます。しかし、一つのテーマに対して、様々なモチーフで書いてみたいという、沸き起こるような作者の創作意欲があったことの証であったようにも思います。

「副級長」には、ある一日に起こった出来事を通して、主人公の克己がみせる心の動きが表現されています。六年生の克己の組のやんちゃな子たちは、綴り方の時間に先生がノートをのぞきこむのがいやで、机間巡視できないように机をくっつけてしまいます。先生が黙って教室を出てしまうと、皆は不安になります。級長の永田君に誘われて、副級長の克己は先生にあやまりに行き、やっと許されます。

得意になった克己は、帰り道にとんでもないいたずらをします。それは中学生のいとこから聞いた、汽車のレールの上へ五寸釘をのせて、電車にひかせペチャンコにさせるという遊びです。それがどんなに危険なことだったかを最後には気づいて、たまらない気持になります。「僕と永田君のおかげで、みんながゆるされたんだ」「僕は、みんなよりえらいんだ」という慢心が、自分を過大評価させ、年上の人たちの蛮行を真似るという結果につながっていきます。

しかし、もし汽車が転覆してしまったら、という不安と、もう少しで命を落とすところだったんだという後悔が、「自分はえらいのでもなんでもない」「先生のおかげで副級長にさせてもらっているだけだ」という恥ずかしい気持ちに変わりました。

「西瓜」でも、似た情景が書かれています。学校の近くに住んでいる一人暮らしの島おばあさんは、皆からいたずらをされ、一年生の子どもにまでばかにされています。ある日主人公の四年生の「私」は、体操の時間に見学をしていて、島おばあさんの家の前の洗濯だらいに冷やしてあった西瓜を割ってしまいます。しかし、割れた西瓜は元には戻りません。この時初めて自分たちのしたことの重大さに気づき、後悔をします。そして、これからは一切、島おばあさんにいたずらをしまいと、しみじみ思うのでした。

理由もなく自分が相手より偉いと思ったり、いたずらを正当化したりしているうちは、それが悪いことだとはなかなか気付きません。しかし、重大な結果を目の当たりにして初めて、二作品の主人公たちは、自分が取りかえしもない罪を犯してしまったと反省しています。

これは、子ども時代を回想した作品のようではありますが、森三郎さんは、昭和八年という景気よく騒がしい時代の後ろに、暗い足音を感じていたということを示しているような気がします。ご本人に直接お伺いしてみたかったと、残念に思います。

ところで、この二作品は具体的な地名は出てきませんが、「西瓜」の中に出てくる「校訓」は亀城小学校の当時の校訓であったと、会員の水野さんがご自身の「児童手牒」の裏表紙を示してくださいました。

「我ハ日本人ナリ　向上ヲ旨トスヘシ　自重ヲ體スヘシ
協同ヲ重ンスヘシ」（本文では「我々」、カタカナ部分はひらがな）

他にも当時の刈谷を想像できる表現があり興味深いです。

○　次回予定　7月10日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和8年11月号初出作品　「ほたる」・「ぬり繪」